

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：22401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K10361

研究課題名(和文)統合失調症者の病いと「折り合い」尺度の開発及び「折り合い」支援プログラムの構築

研究課題名(英文)Development of the "Scale of Identity Adaptation (SIA)" for People with Schizophrenia and build a support program

研究代表者

瀬戸口 ひとみ (SETOGUCHI, HITOMI)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授

研究者番号：90594391

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：統合失調症者が、地域で自分らしく生活するためには、病いと「折り合い」をつけることが必要と考え、まず「折り合い」の測定尺度を作成することを目的とし、協力を得られた当事者を対象に調査を行った。結果、「折り合い」尺度(案)33項目は、主因子法(プロマックス回転)によって4因子が抽出された。試案33項目は、項目分析によって24項目となり探索的因子分析の結果、信頼性は確保された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

統合失調症を持つ人々が病いを持ちながら自分らしく生きることは、病いと折り合いをつけることが不可欠である。しかし、それらの人々が病いと折り合いがついているか否かを測定する尺度はない。この研究は、その尺度として作成し、一定の妥当性、信頼性が検証された。この尺度を用いることによって、当事者が自分自身の病いと折り合いがついているかや、不足している項目を知ることによって、当事者が必要な支援を求めることができるようになる。これは、当事者中心の支援として意義あることと考える。

研究成果の概要(英文)：Participants with schizophrenia who thought that it was necessary to make a "commitment" with their illness in order to live in their own way in the community, and first aimed to create a measurement scale for "commitment". Was investigated. As a result, 4 factors were extracted from the 33 items of the "commitment" scale (draft) by the main factor method (promax rotation). The 33 items in the tentative plan became 24 items by item analysis, and as a result of exploratory factor analysis, reliability was ensured.

研究分野：精神看護

キーワード：折り合い 統合失調症 病い 尺度開発

1. 研究開始当初の背景

精神疾患である統合失調症を抱えながら生活していくためには、症状をコントロールするために日常生活を修正する必要がある。統合失調症者は、これまで疾患の特徴から自己を客観的に認識する機能が低下していると考えられ、自己を語ることを拒絶されてきたが、近年当事者の発言から当事者にとっての病いの意味や障害への認識が明らかになってきた。同時に当事者は、病いの意味や病いへの認識を得る過程において「病気そのものからくる辛さ」や「自己を再構築する辛さ」「服薬や入院体験の辛さ」を体験していることも明らかになった。当事者が「自分を取りもどす・再構築する」ことについて「誰も手を引いてくれなかった」と述べているように、自己の再構築いわゆる「折り合い」をつける援助について医療者側から報告されたものは少ない。しかし、これまで当事者が苦しみながら自分で辛さを乗り越え、自己を再構築してきたとの言葉からこのような援助を必要としていることは明白である。

統合失調症は、症状の多様性などから個別性が顕著であり、長い経過を経ても病いとともに生きることに困難さを伴うことが多い。これは、前述したように具体的な援助方法が確立されていないことも要因と考えられる。病いと「折り合い」をつけることは統合失調症者が自分らしく生きることにつながり、生活の質の向上に寄与すると考える。筆者らは病いとの「折り合い」について和論文 32、英論文 2 を分析対象とする概念分析を行い、当事者は、【病気との共存】や【自己に対する肯定的認識】【今の自分にあった家族や人との付き合い方】【新たな価値観の獲得】【セルフモニタリングの強化】の過程を辿り、そのうち【自分らしく生きる】ことに至ると定義した。しかし、地域で「自分らしく生きる」ための病いとの折り合いをつける支援については、有効なものが見当たらない。そこで、本研究では、その定義を基に、「折り合い」の測定尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討することとした。

2. 研究の目的

先行研究で明らかにした定義を基に、「折り合い」の測定尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討することである。

3. 研究の方法

1) 尺度原案作成

構成概念を検討し、病いとの「折り合い」質問項目を以下の手順で作成した。質的研究の結果と先行研究から「折り合い」を表している項目の抽出を行い、WBL (ワークライフバランス、以下 WBL) の研究者 2 名とメンタルヘルスの専門職を含む看護系の大学教員 15 名で「折り合い」がついていると思われる状況や行動についてブレインストーミングを行い、評価は「まったく当てはまらない」(1点)「当てはまらない」(2点)「どちらかといえば、当てはまらない」(3点)「どちらかといえば、当てはまる」(4点)「当てはまる」(5点)「大変当てはまる」(6点)6 件法とした。次に、妥当性の検討と項目修正を行った。表面的妥当性は、臨床経験 5 年以上の様々な立場の看護師 (看護師長・主任・スタッフナー) と WBL の研究者 1 名とメンタルヘルスの専門職を含む看護系大学の教員で構成された約 14 名で検討し、「折り合い」を測定する内容になっているか確認した。その結果、病いとの「折り合い」は、【病いの受容】4 項目、【家族の支援、仲間の支援、医師・看護師の支援】5 項目、

【セルフコントロール】5項目、【思考の転換】4項目、【社会的な役割と活動】4項目、【仕事生きがい】4項目、【生活を楽しむ】3項目【今が幸せ】4項目、計33の質問項目とした。

2) 調査

地域で生活し、社会福祉法人(福祉施設)や精神科クリニックに通所、または当事者の会で協力を得られた10施設の計265名を対象とし、無記名自記式質問紙調査を2018年10月~2019年3月に実施した。調査内容は、対象者の属性:性別、年齢、発病年齢、入院経験、入院回数、服薬の有無、同居者の有無、病いと「折り合い」尺度、外的基準としてコーピング尺度(尾関,1993)を用いた。尺度は14項目からなり、回答は「いつもする」[3]「時々する」[2]「たまにする」[1]「全くしない」[0]の4件法となっている。本尺度の使用については尺度開発者より使用許可を得た(2018年5月)。

3) 分析

統計ソフトIBM SPSS Statistics 25.0を用いて、記述統計量、信頼性分析、妥当性分析を行った。解析データの優位水準は5%未満とした。

4) 倫理的配慮

対象者の所属する組織の施設長に、研究の趣旨を文書及び口頭にて説明し、研究に対する同意を得た。対象者には文書にて、研究の主旨と目的、方法、下記の倫理的配慮について説明し、結果公表に際しての匿名性を保証した。調査への協力は自由意思に基づくものとし、参加の拒否や不同意による不利益は一切ないこと、データは統計処理をし、個人が特定されないこと、本研究の目的以外には使用しないこと、調査票、データの管理方法を明記し、細心の注意を払うことを約束した。調査票は無記名とし、白紙での投函も可能であることを説明した。本研究の遂行にあたり、本研究は、秀明大学の倫理審査委員会の承認を受け実施した(2018年10月23日承認番号18E002A)

4. 研究成果

1) 結果

(1) 回収率

社会福祉法人(福祉施設)や精神科クリニックに通所しながら地域で生活している、または当事者の会や家族会で協力を得られた10施設の計265名に調査用紙を配布し、郵送法にて87部(回収率33%)が回収された。そのうち欠損値10部を除く77部(有効回答率89%)を分析対象とした。

(2) 対象の背景

対象者は、男性42名(55%)、女性30名(39%)、無記名5名(6%)であった。年齢は、中央値48(80-20)歳代であった。平均年齢は、男性48.5歳、女性45.7歳であった。年齢別では、最も多かったのが40代28名で、次いで50代20名、30代13名であった。

(3) 項目分析

天井効果・床効果

天井効果に該当する項目では、項目5「理解してくれる家族の存在がある」6.105、項目10「薬の量の調節を医師に依頼したことがある」6.015が平均値±SD3.0以上、であったため除外項目とした。床効果に該当する項目はなかった。

(4) 妥当性の検証

探索的因子分析

病いと「折り合い」尺度(案)31項目は、主因子法(プロマックス回転)によって4因子が抽出された。因子負荷量0.35以上を採択の基準とし、試案31項目から、7項目を除外し、24項目について探索的因子分析を行った。削除した項目は、1「入院したときの状況が今になったら理解できる」、2「症状を自分なりに受け入れている」、29「好きな時に起きて好きな時に寝るなど、自分が思う通りの生活をしている」、33「今は幸せと感じる」、7「自分をわかってもらえるようすすんで話しかけるようにしている」、11「自分の病気の症状について学んだことがある」、14「自分の体調が悪いときに助けを求められる」であった。抽出した因子は、第1因子『安心できる居場所と活動』、第2因子『やりがいと仕事』、第3因子『信頼できる他者の存在』、第4因子『生活を楽しむ』とした。4因子構造の信頼性係数であるCronbachの信頼係数は第1因子0.851、第2因子0.803、第3因子0.828、第4因子0.795を示した。サンプリングの妥当性(Kaiser-Meyer-Olkin:KMO)については、0.640を示した。以上のことから信頼性は確保された。

基準関連妥当性では、外的基準として用いたコーピング尺度の合計得点との相関は、Spearmanの順位相関係数を算出した($r = 0.637$ 、 $p < 0.01$)。

2) 考察

(1) 病いと「折り合い」尺度概念の信頼性

本尺度は、先行研究と先行文献から尺度原案を作成し、項目分析と探索的因子分析により24項目4因子を確認した。尺度の信頼性については、Cronbachの信頼係数は第1因子0.851、第2因子0.803、第3因子0.828、第4因子0.795を示した。信頼係数は、1に近いほど信頼性が高いことを示す¹⁷⁾とされており、本尺度の内的整合性は検証された。

(2) 妥当性

探索的因子分析による因子数は、設定した概念による【病いの受容】、【家族の支援、仲間の支援、医師・看護師の支援】、【セルフコントロール】、【思考の転換】、【社会的な役割と活動】、【仕事が生きがい】、【生活を楽しむ】、【今が幸せ】の8因子ではなく、『安心できる居場所と活動』『やりがいと仕事』『信頼できる他者の存在』『生活を楽しむ』の4因子となった。第1因子の『安心できる居場所と活動』は、【病いの受容】、【思考の転換】、【社会的な役割と活動】の項目に類似していた。第2因子の『やりがいと仕事』は、【仕事が生きがい】第3因子の『信頼できる他者の存在』は【家族の支援、仲間の支援、医師・看護師の支援】の項目を含んでいた。第4因子の『生活を楽しむ』は、【生活を楽しむ】、【今が幸せ】と類似していたが、【セルフコントロール】の12「自分なりに症状への対処を工夫出来ている」を含んでいた。

(3) 基準関連妥当性については、外的基準としてコーピング尺度を用いたが、病いと「折り合い」尺度との間に相関は見られなかった。

(4) 病いと「折り合い」尺度の構成要素

先行研究によると【病気との共存】や【自己に対する肯定的認識】、【今の自分にあった家族や人との付き合い方】、【新たな価値観の獲得】、【セルフモニタリングの強化】の過程を辿り、そののち【自分らしく生きる】ことに至る¹⁵⁾とあったが、「折り合い」尺度の因子は『安心できる居場所と活動』『やりがいと仕事』『信頼できる他者の存在』『生活を楽しむ』の4因子となった。『安心できる居場所と活動』では、病いを経験して考え方が変わった自己と参加できている活動によって居場所を見出していると考えられる。『やりがいと仕事』では、仕事をする中で、やりがいを得ていることが明らかとなった。先行研究では仕事に相当する部分は見当たらなかったため、重要な要素と考える。『信頼できる他者の存在』では、他

者を思うと同時に自己に対しても尊重している項目「1日1日を大切に過ごしていこうと思う」、「自分の未来を考えられる」が見られた。『生活を楽しむ』は「生活を楽しむ」「今の生活に満足している」等の項目から生活への満足度が見いだされた。

これらの4因子を調査することにより地域での生活を評価することが可能となる。得点により満足度の低い項目への支援を提供することができる。その結果、当事者の地域生活の継続とQOLの向上に寄与できると考える。

本研究で開発した病いと「折り合い」尺度は、4因子24項目からなり、妥当性と信頼性が検証された。信頼性係数(クロンバックの係数)は、尺度全体で0.75以上を示したことから、この尺度は信頼性のある尺度であることを確認した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Hitomi SETOGUCHI, Eiko SUZUKI, Naoko SHIOMI, Chihiro Asakura, Hiroko Matsuya
2. 発表標題 Preliminary Survey for a Scale Measuring Oriai (identity adaptation) with Illness in People with Schizophrenia: Toward Educational Intervention
3. 学会等名 Hawaii International Conference on Education 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hitomi SETOGUCHI, Eiko SUZUKI, Saori NAKAZAWA, Naoko SHIOMI, Yuko TAKAYAMA, Chiaki KINOUCHI
2. 発表標題 Developing a scale for measuring “identity adaptation (Oriai)” in schizophrenia patients ~Towards teaching of identity adaptation(Oriai)~
3. 学会等名 Hawaii International Conference on Education 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 英子 (Suzuki Eiko) (20299879)	国際医療福祉大学・医療福祉学研究科・教授 (32206)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------